

入学試験は人的資本蓄積を促進するか？

高等学校入学者選抜試験の変遷を利用した実証分析*

赤林 英夫[†]

直井 道生

2009年1月19日

概要

本論文では、公立高等学校の入学試験制度の変遷に関する情報を利用して、試験科目数の制度的な変更が地域の人的資本蓄積全体に与えた影響を推計することを試みた。都道府県単位のパネルデータを用いた DID 推計の結果、入学試験の試験科目数の増加は、当該都道府県における大学進学率を有意に引き上げることが明らかになった。この結果は、入学試験が生徒や家庭に対して人的資本蓄積のためのインセンティブとして機能していることを示唆する。制度変更の内生性や試験科目数の変化が高校入学時点での生徒のスクリーニングに与える影響を考慮しても、上記の結論は変わらない。

Keywords: 入学試験制度、入試科目数、大学進学率、人的資本蓄積

JEL Classification: I21, I28, H75

* 本論文作成に当たり、科学研究費補助金 基盤研究(A) 一般 20243020 (代表 赤林 英夫)「ミクロ計量経済学的手法による教育政策評価の研究」の助成を利用しました。また、本論文での分析に当たり、黒羽亮一氏からは、昭和 30-40 年代の高等学校入試制度に関する資料を快く寄贈して頂きました。ここに厚くお礼を申し上げます。

[†] 赤林：慶應義塾大学経済学部、直井：慶應義塾大学大学院商学研究科。